

現代日本人の標準語感覚

佐 藤 亮 一

一、方言の現状

明治以降、わが国では地域社会の共通語化が徐々に進み、とくに第二次大戦後は加速度的な勢いで各地の方言が衰退しつつある。

昭和二〇年代後半にNHKが全国各地の方言会話の録音・文字化を企画したとき、民俗学者の柳田国男氏は「残念ながら三〇年おそい」ともらし、「しかし離島や谷間の行き止まりの村、他との交通のあまりない土地で、そこに生まれ育った老人たちには、まだ混りけのない古い方言が残されているのではないか」と指摘したとい⁽¹⁾う。国立国語研究所は、昭和三〇年から十年をかけ、明治三六年以前に生まれた男性を対象に方言語彙の全国分布調査を行い、『日本言語地図』（全六巻）を刊行した。そこには、江戸期の伝統的な方言を引き継いでいると思われる鮮やかな方言分布が示されている。

しかし、この地図集を各地の五〇歳以下の人たちに見せると、項目にもよるが、多くの場合、このような方言は聞いたことがないという反応がかえってくる。

共通語化の波に伴って、大衆の方言に対する意識も大きく変化した。十数年前までは地方出身の青年が方言をからかわれて自殺するという事件がしばしばあり、「方言を笑うな」という投書が多く、「方言コンプレックス」に関する研究も盛んだった。今では逆に「方言が失われて淋しい」「方言を大切に」といった投書が目立つ。近頃はテレビの「方言ドラマ」に人気があり、「方言弁論大会」「島口大会」「全国方言大会」が各地で行われているが、このような方言ブームの背景の一つに、ことばを含む伝統的な地方文化の衰退と、それに対する郷愁ないし危機感があることは確かである。

しかしながら、地方の人たちが方言を全面的に捨ててしまったた

かと言え、そのようなことはもちろんない。地方に行つて一般の旅行者が純粹の方言に接する機会はまだであるが、裏通りの床屋や地元の人たち向けの喫茶店などに入つて耳を傾ければ、青年たちのかわす方言会話に触れることができる。筆者が山形県のある町で喫茶店に入つたとき、そこでかわされている青年たちの会話をほとんど理解できなかった。ところが私が話しかけると、彼らのことばは一転して共通語になるのである。しかし、子細に観察すると、地方の人たちが話す共通語は、アクセントやイントネーション、さらにはときには語法の面で方言的な特徴を含んでいる。それは意志の伝達の障害にはならないが、スタイルの面で地方色を感じさせるといふ程度のものである。このような方言色混じりの共通語を「地方共通語」と呼ぶことがある。南九州や沖縄出身者の人たちは「ソレデデ・ス・ネー、私ハデ・ス・ネー、忙シカタカラデ・ス・ネー」のように「デ・ス・ネー」を頻用し、また「先生がオイデニナラレタ」とか「ゴ卒業ナサラレタ」のように、標準語としては好ましくないとされる二重敬語、三重敬語を多用する傾向がある。これも地方共通語の一例である。

二、知らずに使う方言

地方共通語とは、地方出身の人たちが非共通語と気づかずに使

言語形式である。言いかえれば、真の共通語（全国共通語）と思ひこんで使っていることばである。全国共通語とはあらたまった場面で使われる全国共通の言語形式である。特定の地域で使われる形式はたとえそれがあらたまった場面で使われるとしても全国共通語とは言えない。

国立国語研究所では昭和四七年に熊本県唐川沿岸地域で高年層を対象に場面によることばの使い分けに関する調査を行った。場面は下位場面（くつろいだ場面）から上位場面（あらたまった場面）に至る五場面——「同年配の土地の人とくつろいで話すとき」「土地の若い人とくつろいで話すとき」「村の会合の席などであらたまって話すとき」「熊本市で初対面の人と話すとき」「東京で初対面の人と話すとき」——を設定し、語彙・語法・待遇表現などの数十項目について、項目ごとにそれぞれの場面における使用語形をたずねた。結果は、多くの項目について、下位場面では方言形、あらたまった場面では共通語形が多く使われ、方言と共通語との場面による使い分けの傾向が顕著であった。しかし、値段をたずねるときの「いくら」の項目では、下位場面ではイクラが多く、上位場面になるほど方言形のナンボが増加するという一見奇妙な結果が得られた。また「（大根を）煮る」の項目でも上位場面になるにつれてニルをタクに言い換える傾向が見られた。²⁾これは、ナンボやタクが関西

(近畿)の方言であり、九州地方の人たちが関西方言に言語的なあこがれ(Breitage)を感じているために、関西方言の形式を全国共通語形と誤認したものと解釈される。したがって、このナンボヤタクも熊本地方における地方共通語形と認められる。このような地方共通語形の例は、他の地方については北海道における「起きる」「見る」の命令形オキレ、ミレ、同可能表現のオキレル、ミレル、(手袋を)ハクという形式などが有名である。国立国語研究所が北海道富良野市民を対象に昭和三四年と同六一年に行った調査によれば、(手袋を)ハクを使用すると答えた者は、三四年が九六%、六一年が九四%で二七年間ほとんど変化がなく、後者の調査では約二〇%の者が(手袋を)ハクを全国共通語だと思っている。⁽³⁾

右に述べた例は地域社会の成員の多くが方言を共通語と誤認した例であるが、個人的体験としての誤認例も多い。

国立国語研究所員の宮島達夫氏(昭和六年生まれ)は茨城県水海道市の出身であるが、東京の大学に入るまでマンネンピツ(万年筆)を共通語と思って疑わなかったという。⁽⁴⁾ エンピツとの関係から見ればマンネンピツを共通語形と思いこむのは無理からぬところであろう。似たような例としては静岡・愛知など中部地方におけるイタダキマシタ(「ごちそうさま」の意)がある。これも、イタダキマス・イタダキマシタというパターンであるから、共通語のイタダキマ

ス・ゴチソウサマ(デシタ)よりも整合性がある。

言語学者の柴田武氏(大正七年生まれ、名古屋出身)は「先生が本をヨンデミエル」のようなシテミエルの敬語形式を共通語と誤っていたという。⁽⁵⁾ 補助動詞としてのシテミエルではなく、「先生がミエタ」のような敬語動詞としての用法は共通語と認められるから、この誤認も起るべくして起ったものである。このような一見個人的誤解に見える例も、その地方の多人数を調査してみれば、実は地域社会全体にかかわる現象であり、地方共通語形の一つと認められる場合が多いのではないかと推察される。

大阪大学助教授の真田信治氏(昭和二十一年生まれ、富山出身)は、かつて国語研究所員であったが、彼は「食パン」をシヨッパンと発音して同僚の研究員に聞きたがめられた。言うまでもなく東京ではシヨクパンが普通であり、シヨッパンには異和感がある(筆者は東京出身ではないから、厳密には異和感があるだろうと言うべきである)。真田氏はその後「食パン」をシヨッパンと発音する地域を調査し、それが名古屋を中心とする中部地方域と九州各県に集中することを明らかにした。⁽⁶⁾ 筆者は同地方出身の大学生に会うたびに「食パン」を発音させてみたが、その大部分はシヨッパンと発音し、シヨッパンと発音した者のすべてが、この形を共通語形と思いこんでいた。

当然のことであるが、地方出身の言語研究者は地方出身の一般人や、あるいは東京出身の言語研究者よりも、自分の使うことばが標準語であるかどうかについて神経質になっている。筆者は高知県出身のある方言研究者から「ひとまわりする」「歩きまわる」の意のメグルが標準語であるかどうかたずねられたことがある（後述するように、上の文脈における「から」の使用が標準語の用法として正しいのかどうか、筆者には自信がない）。「名月や池をめぐりて夜もすがら」（芭蕉）という句もあることから、当然標準語であろうといったんは答えた。しかし、考えてみると、日常の話しことばの中で「今日は池をメグッタのでくたびれた」のように使うのだとすれば、少くとも筆者の感覚では、これは標準的用法とは言えない。

『新明解国語辞典』（第三版）によれば、「めぐる」には(一)回って、元へもどる「因果は――」「一年月」(二)あちこちに立ち寄る。「知人の家を巡り歩く」(三)まわりを囲む。とりまぐ。「彼を――五人の女性」(四)ある事(と、その周辺の事)に関連する。「賛否をめぐって」「……を――論議」の用法があるが、「ひとまわりする」の意に近い(一)の用例は慣用句のみであり、「歩き回る」の意に近い(二)の用例は「めぐる」ではなく「めぐりあるく」である。したがって、「池をめぐる」の用法は、古語ないし、文章語であって、現代の話しことばとしてはやはり標準的とは言えない。「共通語」と「標準語」との相違

については従来いろいろの議論があるが、(全国)共通語(形)は「話しことば」として現実に広く(全国的に)使われていることばであり、標準語(形)は「規範として広く認められており、書きことばとして使用に耐えるもの」という立場をとれば、「池をめぐる」は現代標準語ではあっても現代共通語とは認められないとすべきかもしれない。

前述の柴田武氏は「苺がイロンダ」と口にされ、筆者が「それは名古屋の方言ですか」とたずねたところ「え、イロムは共通語ではないんですか」とびっくりされた。すぐに手もとの辞書を引いてみると、現代国語辞典の類に「いろむ」の見出しはなかったが、古語や方言も併載している『日本国語大辞典』には「いろむ〔色〕」の見出しで「植物やその実などが成熟して色がつく。色づく。」とあり、近世の文献例と富山・長野・岐阜・愛知の方言例が載っていた。この「いろむ」は古語あるいは方言であって、現代語としては標準語でも共通語でもない認められる。柴田氏は「良いことばなのにねえ」と残念がっておられたが、まさに「共通語・標準語として採用したい方言」の一つと言えそうである。

筆者は昭和一二年の東京生まれ育ちであるが、高校三年間を山形市で、大学以降十一年間を仙台で過ごし、以後二十年、再び東京に住んでいる。父親が山形市出身、母親が高松市出身のためかアクセ

ントが完全な東京アクセントとは言えないが、語彙や語法に関して標準語を使用していると思ひ込んでいた。ところが最近「犬カラ追いかけられた」と書いてその用法が標準語としておかしいと指摘され、びっくりした。早速現在作成中の『方言文法全国地図』(7)第一巻を調べてみると、「犬カラ追いかけられた」は山形県のほぼ全域と九州西南部に分布しており、そのほかの大部分の地域は「犬ニ追いかけられた」であることが判明し、親の影響あるいはわずか三年間の高校時代の影響を受けていることを知って愕然とした。そういうえば、東京に來たばかりの頃、帰宅の際に「オサキシマス」と挨拶したところ、当時の室長から、東北大出身の人は皆そう言う、東京では「お先に」あるいは「お先に失礼します」であって「オサキシマス」とは言わないと言われたことがある。その後調べてみたところ「オサキシマス」という表現は東北一円で広く使われていることが分かった。最近では自分のことばに自信をなくし、ことあるたびに東京生まれ育ちの人に、東京ではどう言うのかと質問して確かめている。なお、東京人の感覚では、「犬カラ追いかけられた」は明らかにおかしいが、「息子カラ手伝ってもらった」は「ややおかしい」、「息子カラもらった」は「息子ニもらった」とともに使用しうるといふ。方言によっては「船で來た」を「船カラ來た」、「運動場で遊ぶ」を「運動場カラ遊ぶ」という地方があるから、「から」「に」

「で」の用法をめぐって体系的、あるいは歴史的にさまざまな問題があることが推察される。

助詞・助動詞の用法に関しては方言差(地方差)が非常に大きい、顕著な例を一つあげよう。仮定表現「たら」「ば」「と」の標準語における用法差はまだ十分明らかにされておらず、さまざまな議論がある。筆者が首都圏の大学生百数十人を対象に調査してみたところ、①「もしうちが火事に(ナッタラ・ナレバ・ナルト)どうしよう」という文脈では全員がタラを使用し、②「右に(行ッタラ・行ケバ・行クト)銀行があります」ではトが77%、バが16%、タラが6%、③「もっと早く(起キタラ・起キレバ・起キルト)良かった」ではバが98%、タラが2%、④「もし六時までに東京駅に(着イタラ・着ケバ・着クト)次の汽車に間に合うんだけど」の場合にはバが88%、タラが8%、トが3%という結果になった。(9)すなわち、東京(首都圏)では、①と②と③④との間に大きな用法差があることがわかる。これに対して関西では「たら」「ば」「と」の用法差はほとんどなく、上記のいずれの文脈でも、もっぱらタラを使用するといふ。(10)

日本語を学習する外国人にとって、日本語の助詞の用法がとくにむずかしいと言われる。したがって日本語教育においては助詞の学習にかなりの力を割いているはずである。しかし、助詞の用法に関

してこのように大きな地域差が存在する以上、地方出身の日本語教師は自分の言語感覚を過信することなく、常に標準的用法が何であるか注意し、それに関して研究書に十分な記述がない場合には、さまざまな年代の東京人と接触して彼らの用法を確かめ、自らの標準語感覚を高める必要がある。

以上、地方出身者が方言を標準語と誤認した例、あるいは誤認する可能性の大きい例について述べた。「万年筆を」マンネンピツ、「食パン」をショッパンと言っている程度では異和感は覚えてもコミュニケーション上の障害を生むことはない。しかし方言と共通語との意味のずれがあれば、ときには大きく誤解を生じる。

作家のS氏は北海道に滞在中のある日、原稿を東京に送ろうとした。その時は台風通過の直後で交通が混乱していたので、郵便局の窓口でその日は発信可能かどうかをたずねた。ところが、何度たずねても局員の返事は「ワガンネー」であった。S氏は立腹して新聞に投書した。調べもしないので「わからない」とは何たる傲慢な態度であるかと。これを読んだ東北人から反論の投書が来た。北海道や東北では「だめだ」「不可能」の意味で「わからない」という。S氏の立腹は誤解にもとづくものであると。⁽¹⁾

この種の誤解は共通語と語形が同じで意味の異なる方言形について起りやすい。そして、その例は枚挙にいとまのないくらい多い。

東京都内では「あさって」の次の日をシアサッテ、その次の日をヤノアサッテと言うが、その周辺の東京多摩地方、千葉、埼玉、神奈川、山梨、栃木、茨城などでは、逆にヤノアサッテ→シアサッテの順である。したがって、東京の人と千葉の人が「シアサッテに会おう」などと約束するのは危険である。九州には共通語の「あざ」(痣)をホクロ、「ほくろ」(黒子)をアザという所があり、東北地方北部では「あざ」も「ほくろ」も区別せずアザと呼ぶ。北海道や東北地方などでコワイは「恐ろしい」の意味ではなく「疲れた」の意である……等々。

現代では共通語が急速に普及したという印象が強すぎるため、現代日本人の多くは自分達が完全な共通語を話せるという錯覚を起しているのではないだろうか。一方、東京生まれ育ちの人の場合、自分のことばが全国の人々に完全に通じると思いがちである。都会人の中には「いまも日本に方言があるのですか」などと不識な発言をする人さえいる。地方の人達がよそ者に対して共通語で話すからといって彼らが日常生活でも方言を捨てたわけではないことは最初に述べたとおりである。そして、一昔前に比べれば日本人の共通語使用能力は飛躍的に増加したとはいえ、全国共通語と地方の人たちが話す共通語(地方共通語)との間にずれがあることも確かである。徹底した共通語教育を行ってそのずれを矯正しようとするより

も、そのようなずれがありうることを認識しつつ対話することが、東京と地方、あるいは地方どうしの望ましいつき合い方ではないかと思う。

三、方言に包囲された東京語

現在、東京に住む人たちの多くは「東京では標準語（共通語）」が話されている、そして、「標準語の使用範囲は東京のみならず、その周辺のいわゆる首都圏に広がっている」と思いこんでいるらしい。確かにそれは一面では真理である。少くとも現在の東京在住者の大半を占める「よそ者」どうしで会話をしているかぎりでは、方言らしきものはほとんど聞こえてこない。しかし、都区内はともかく、新住民の多くが住んでいる郊外で、地元の旧住民の会話を耳にする機会があれば、音韻や語法を中心として標準語らしからぬ響きに気づくはずである。また、都内の下町でも高年層においては、下町弁（東京方言）の特徴が依然として保持されている。

国立国語研究所編『日本語地図』は昭和三〇年から四〇年にかけて明治三十六年以前に生まれた人々を対象に日常の話しことばを調査した結果を地図化したものである。これを見ると、先に述べた「あさっての翌日」の意のシアサッテのように、標準語形が都区内にしか分布していないものがあり、また、中には、魚の「うろこ」

の図のように、都区内を含む東日本全域が方言形のコケまたはコケラであり、標準語形が東京にもほとんど見られない図がある。

さて、『日本語地図』の調査から二十余年を経た現在、東京における分布はどうなっているであろうか。東京都立大学の大島一郎教授を中心とするグループは一九八五年に東京生まれ育ちの老年層と青年層（主として大学生）を調査し、その結果を『東京都言語地図』（一九八六年、東京都教育委員会）として刊行した。これを見ると青年層は著しく共通語化しているが、老年層の分布は、基本的には『日本語地図』とほとんど変わっていない。

『東京都言語地図』には、多摩地区に独特の方言形が分布するものが多い。『肩車』のテングルマ、「蟻」のアリンコ、「松笠」のマツホングリ、マツコゴレ、マツダンゴなど、「霜柱」のタッペ、「竹馬」のタカアシ、「かまきり」を意味するトカゲ、「とかげ」を意味するカガミツチョ、「疲れた」の意のガメタ、「（枝を）折る」のオピショル、文法項目では、「（りんごを）皮ごと（食べる）」のカワマシ、「おいでになる」のキサレルなど、また、アクセントについても、「朝日が」「命が」「涙が」「枕が」「紅葉が」「わらびが」「わさびが」「火鉢が」「火箸が」の○○○○型（第二音節が高い中高型。なお、これらの語は都区内では●○○○型、すなわち第一音節が高い頭高型である）のように多摩地区が非標準語アクセン

ト型のものが多い。

右の例のように多摩地区に方言形が分布する例のほか、標準語形が都区内の山の手のみで使われ、下町と多摩地区が方言形の項目もある。「風呂敷」のフルシキ、「たった二つしかない」のフタツホカやフタツヨリホカ、「来ない」のキナイ、「ボールを蹴れ」のケロ、「ちゃんとしゃべれ」のシャベロなど、アクセントでは「赤かった」のアカカッタ（標準アクセント型はアカカッタ）がその典型である。

以上にあげた例は、青年層では東京全域がほぼ共通語化しているが、「片づける」のカタスのように、都区内の下町および多摩地区の一部（都区内寄り）で使われ、老年層と青年層の分布がほとんど違わない例も見られる。地方出身の若者で東京のカタスを標準語と知っている人がいたが、うなづけるところである。

以上、『東京都言語地図』によって下町や多摩地区に方言的特徴が見られる例をあげたが、東京都と千葉県との間にも江戸川を境として大きな言語差があり、その具体例は加藤正信・加藤貞子「市川の方言」⁽¹²⁾などで見ることができる。また、東京北部の清瀬市、東村山、東久留米市、練馬区、板橋区、北区などには埼玉県南部と連続する方言分布が見られ、その様相は、柴田武「埼玉県南部・東京都北部地域の方言分布（一）」（一九八四）に詳細に示されている。

各種の資料からうかがえるように、標準語形を話しことばとして使用する地域は明治・大正期には東京の山の手地域に限られていたであろう。そして、下町や多摩地区の方言は現在も生きつづけているのである。

このように、東京は周辺のさまざまな方言に囲まれているが、これらの方言の一部は都区内に流入し、東京の若者のことばにとり入れられている。『東京都言語地図』を見ると、「あとと行くしかない」のイクッキヤ、「それでいいじゃないか」のイージャン、「高校野球を馬鹿みたいになって応援した」のバカミタクなどのように、老年層の図では皆無であるか、あってもごくわずかしは見られないが、青年層の図では爆発的な勢いで広がっている表現がある。この中のジャンについては、元来は静岡・山梨・長野の方言であったが、昭和初期に東海地方に急速に広まり、この数十年の間に東海道を北上してきたのではないかとする井上史雄氏の推定がある。⁽¹³⁾

このように、若年層の間に広がりつつある非標準語形で使用者自身が標準語形ではないと意識している語形を井上氏は「新方言」と呼んだ。井上氏が「東京新方言」として指摘した語形には、ほかにウザッタイ（面倒くさい、不快だ）、違カッタ（違っていた）、チッケッタ（じゃんけんのかけ声）、キレクナイ（きれいでない）、チャリンコ（自転車）などがある。このうち、ウザッタイは、元来八王

子方面の方言であって、それが徐々に東京の若年層に侵入しつつあるものであることが老若両層の分布調査から明らかにされている。

違カタとチックタは千葉方面からの侵入によるものらしい。

これらの新方言は標準語形とは異なり、地方に広がる力は弱いように思われる。しかし、後に述べるが、新方言の一つともされる「起キレル」「見レル」などの「レル言葉」のように、標準語形「見ラレル」「起キラレル」の座をおびやかしつつ全国に広がる様相を見せている語もあり、ショッパイやチャッタのように従来は東日本あるいは関東に使用が限定されていた語形が西日本の若年層に広がる気配を見せている例もあるから、東京新方言の行方については、なお監視を続ける必要があるだろう。

四、東京におけることばのゆれ

特定の地域に、同一の（あるいは類似の）意味・用法に関して複数の形式（言語的特徴）が存在するとき、そこにことばのゆれがあるという。ゆれは新旧両形の接触によって生まれるが、両形の間に一定の年齢差の見られることが多く、ときには文体差や用法差の生じることもある。

『日本言語地図』の「塩辛い」の図では、東日本の大部分がショッパイ、西日本はおよそカライであって、東西対立分布の一典型で

ある。そのほか全国的にシオカライが散在し、東京にはショッパイとカライとシオカライが混在している。東京では元来東日本方言のショッパイに覆われていたが、その後、西日本からカライとシオカライがもたらされ、現在の状態になったと推定されている。ショッパイは話しことばのかつ俗語的で、標準語形はシオカライかカライのいずれかであるとされているが、辞書によっては三者を区別なく本見出しとして立てているものもある。

『東京都言語地図』でも、老年層の図では、ショッパイ、カライ、シオカライ、ショッカライなどが錯綜しており、都区内・多摩地区を通じて地域差は認められない。しかるに、若年層の図では大部分がショッパイであり、ほかには山の手線の周辺にシオカライがわずかに見られ、カライは多摩地区の二地点に存在するにすぎない。この分布を見る限り、将来はショッパイが標準語形の地位を奪いそうにも見える。しかし、これは「日常の話しことばの実態」を調査したものの（同書まえがき）であるから、東京の若者が書きことばでもショッパイを多用するかどうか見きわめなければ将来の標準語形を占うことができない。

『日本言語地図』によれば、ショッパイは西日本では皆無に近い状態である（わずかに一地点、福岡県飯塚市でカライとショッパイの両形を答えた者がいる）が、東京の若者の間で優勢になってい

るショッパイはその後果して西日本に広がりつつあるのだろうか。

この点に関する十分なデータはないが、岡野信子氏を中心とする梅光女学院大学方言研究会のグループが北九州市と下関市で行った調査¹⁴によれば、五〇歳代以上ではカライとシオカライ（前者が優勢）であるが、三〇歳代からショッパイが出現し、一〇代ではショッパイが優勢になる。このことは東京地方の若年層の話しことばが、俗語臭を持つものであっても共通語として全国に広がっていくことを示すものとして注目される。

『東京都言語地図』には、ほかにも老年層におけるゆれが若年層で統一化されている例がいくつかある。たとえば、「片足跳び」の図では、アシコンコン、シンコンコン、シココン、ヒココン、チンチン、ケンケンなどが錯綜し、地域差がほとんど見られない。しかるに、若年層の図ではこれらの大部分が消滅し、ケンケンに統一されている。「松笠」の図では多摩地区のマツダンゴなどが消え、マツボックリに統一されている。『日本語地図』の「恐ろしい」の図では、東京にオッカナイ、コワイ、オソロシイが混在する。このうちのオッカナイは俗語臭をもつ語形であるとされ、ショッパイと同様に西日本には見られない。このように、東京で優勢を競っている語形がどのように統合され、それが全国的にどのように広がっていくかは、共通語化のテーマの一つとして興味深い。

「片足跳び」や「松笠」のように大人が日常あまり使わない語については「ゆれ」が話題になることが少ないが、文法的諸形式や音韻など言語の根幹にかかわるゆれは、「ことばの乱れ」として話題になることが多い。その典型的な例は「レルことば」と「ガ行鼻濁音」である。

「見レル」「起キレル」「来レル」などの「レルことば」はこの問題の先覚者である中村通夫氏によれば東京の話しことばでは昭和初期から使われはじめたという¹⁵。そして第二次大戦後は使用者が急増し、識者の反発をかつて「乱れ」の代表として攻撃されるようになった。

言語研究者の間では「レルことば」の増加はもはや食い止めることができないという見方が有力である。中年以上の者で「レルことばはおかしい」と思っている者でも、話しことばの中ではうっかり「見レル」と言ってしまうことがある。飯豊毅一氏によれば、柳田国男氏は昭和二七、八年ごろには「見レル、来レルなんて言い方はけしからん」と嘆いていたが、三四、五年ごろには「もう、あのことばは仕様がないう」とあきらめたという¹⁶。これはずいぶん早い「敗北宣言」である。

しかし、各種の調査によれば、確かに若年層ほど「見レル」「起キレル」を多用するが、若者のすべてが「見ラレル」「起キラレル」

を捨ててしまったわけではない。昭和四九年に国立国語研究所が都区内在住者を対象に行った調査⁽¹⁷⁾によれば、「見レル」を使う人は、一五～一九歳で六五%、二〇～二四歳で四九%、二五～二九歳で四二%、以下年齢が高くなるにつれて使用率が下がり、六五～六九歳で一六%となっている。「起キレル」は「見レル」より使用率が下がり、一五～一九歳で三〇%、二〇～二四歳で二六%、二五～二九歳で二二%である。この数字は、大まかに言えば、若者の間でも「〜レル」と「〜ラレル」がほぼ同程度に併存していることと見てとれることもできる。

また、国広哲弥・中本正智両氏の調査結果⁽¹⁸⁾によると、「着レル」と「着ラレル」について、「着ラレル」を「良く使う」と答えた者は、一五～一九歳は約六〇%、二〇～二九歳は約七〇%であるのに対し、「着レル」を「良く使う」と答えた者は、一五～一九歳で約五五%、二〇～二九歳で約四〇%にすぎない。しかも、この調査では、共通語として「着ラレル」と「着レル」のどちらを採用すべきかとも聞いているが、その結果は、「着ラレル」を採用すべきだと答えた者が一五～一九歳で八〇%弱、二〇～二九歳で九〇%近くもあり、これに対して「着レル」を採用すべきだと答えた者は、一五～一九歳で約二〇%、二〇～二九歳で約一〇%にすぎない。つまり、「着レル」を使うと答えた者のうち三分の二前後の者がそれを共通語とし

てふさわしくないと思っていることになる。これは非常に興味深い結果であり、この事実も、共通語・標準語の問題を考える際に大衆の言語の使用実態だけではなく、使用意識（規範意識）も知る必要があること、また、話しことばだけではなく、書きことばについての意識も調査すべきであることを意味していると考えられる。

なお、二九歳以下の「着レル」の使用率が四〇～五五%であるという数字は、筆者の日ごろの観察実感からは少なすぎるようにも思えるが、これは実際の会話を分析したものではなく、面接もしくはアンケートによるものであるから、この数字自体に、回答者の規範意識が多少影響しているとも解釈されよう。「レルことば」の使用についてこれほどの規範意識が働くのは、この問題が識者の間で話題にされていることと無関係ではなからう。ことばの変化を人為的に食い止めることはほとんど不可能であるというのが言語研究者の常識のようでもあるが、このような例を見ると、マスコミや知識人の指導力がことばの変化に全く影響しないわけでもないように思われる。

「レルことば」が「レルことば」の攻撃を受けつつもかなり生き残っているのに対して、ガ行鼻濁音の方は、東京の若者の間では絶滅寸前である。

東京における鼻濁音の変化に最初に気づいたのは金田一春彦氏で

ある。氏の昭和一六年の調査によれば「籠・葉書・鏡・苺・上着・雨傘・駒下駄・忠義・海軍・泳ぐ・此が・皮ごと」について、すべて[ŋ]に発音する人は、当時の中学生七〇人中二八%、[ŋ]と[g]とを混用する人は四一%、すべて[g]に発音する人は三〇%であったという。⁽¹⁹⁾それから四一年後の昭和五七年に東京都文京区根津で行われた調査によれば、「鏡」の場合、七二歳以上は一〇〇%鼻濁音であったが、二四歳以下で鼻濁音に発音した者はわずか五%であった。⁽²⁰⁾

近頃では若いアナウンサーの中にさえ非鼻濁音の者がおり、年配のアナウンサーを嘆かせている。東京におけるこの発音の変化は地方（の鼻濁音地域）にどのように影響しているだろうか。地方における調査データがないので分らないが、たとえば北海道でも同様の傾向があり、札幌では「鼻濁音を守る会」が結成され、年配者が若者に「鼻濁音教育」を行っているという（「北海道新聞」の記事による）。

このような状況下では早晩全国から鼻濁音が消え去ってしまうようであるが、水谷修氏の観察によれば、元来は非鼻濁音の地域であるのに若者の中に鼻濁音が増えるという、東京と逆方向の変化も見られるという。⁽²¹⁾水谷氏はこの現象について「テレビやラジオの普及で共通語化が激しいということが言われているのだから当り前のことなのかもしれない」と述べているが、もし、テレビ・ラジオのア

ナウンサーによる規範的な発音が、東京における大衆の発音傾向に逆って地方に影響を与えたとしたら、先に述べた「レル」「ラレル」に対する意識と関連する問題として興味深い。

アクセントについても同様の問題がある。明治以降の東京におけるアクセント型の変化については多くの論文があり、たとえば、現在大部分の東京人が発音するアカトシボ、トーカイドー（東海道）は明治期にはアカトンボ、トーカイドーという頭高型であったこと、「熊が」は現在の東京で高年齢層は「クマが」、若年層は「クマガ」であることなどは良く知られている。しかし、筆者らの調査によれば、従来指摘されている以上にきわめて多数の語についてアクセント型の変化があり、現在刊行されている各種のアクセント辞典は、この変化に対する配慮が不十分であることが明らかになった。⁽²²⁾たとえば、多くのアクセント辞典が「新」「旧」の注記なしに載せているニチャ（日夜）、ソラミミ（空耳）、ダイヤル、テギレキン（手切れ金）などの型は、われわれの調査では全年齢層を通じて全く現れず（この種の語はきわめて多い。これらは現代東京語では絶滅したか、絶滅寸前と思われる）、一方、タイビョー（大病）、チテン（地点）、チャンネル、ツツジ、ニジカイ（二次会）のように、多くのアクセント辞典に登録されていない型がわれわれの調査では比較的若年の者に多数に現われる語もかなりの数にのぼる。⁽²³⁾

このような現代東京語においてはほとんど使われていないアクセント型は現代共通語・標準語のアクセント辞典からは削除するか、少くとも「旧(古)」の注を付すべきであらうし、若年・中年の多数に現われる型は「新」の注をつけて辞典に載せるべきかと思う。

東京で年齢差の見られる型は地方にどのように広がるであろうか。このような観点からのアクセントの共通語化についての調査が全くないので実態が不明であるが、この点に関する筆者の体験を一つ述べよう。無型アクセント地域である福井市で福井放送の若い女性アナウンサーに会ったことがある。きれいな東京アクセントだったので著めたところ、彼女は「私は中学生のときに放送クラブに入り、標準アクセントを勉強した」と言って、ぼろぼろになったアクセント辞典を見せてくれた。その話に感動したが、ふと思いついて「つつじ」「二次会」などを発音させたところ、ツツジ、ニジカイのように辞典に載っていない東京における新しい型で発音した(辞典はすべてツツジ、ニジカイ)。このことは、本人は辞典で勉強したつもりでいるが、実は多くの語について、東京の新しいアクセント型をテレビ・ラジオ等を通じて無意識に身につけたことを意味するのではないだろうか。

一昔前はアクセントの共通語化の度合は、語彙・文法・音韻(語音)に比して著しく小さいと言われていたが、最近では若年層のア

クセントが各地で共通語化しつつあり、それはテレビの影響によるところが大きいと言われている。共通語の基盤としての東京語の影響の大きさをあらためて思い知ったことである。

五、おわりに

以上、第一節では、共通語化が著しい今日でも方言は生き続けていること、各地の人々は共通語と方言を場面によって使い分けていることを述べ、第二節では、地方に住む人や地方の出身者が方言を共通語と思いこんで使っている例のあることを記した。

地方出身の言語研究者の現代標準語の記述の中に方言が紛れこんだ例もいくつか指摘されており、それだけに、地方出身者はみずからの標準語感覚について神経質である。²⁴しかし、方言と共通語の両方に通じていることは言語研究者にとって有利な側面もある。服部四郎氏は東大の学生の折、自分のアクセント(三重県亀山)と東京のアクセントの相違に興味を抱き、両者を対照して「方言アクセント間の型の対応」という大発見をなし、日本のアクセント研究を進展させた。そもそも、方言の徹底的な記述的研究は、みずからがその方言の話し手であることが望ましいとされている。

第三節では、東京は周辺の方言に包囲されており、標準語の話されている地域は都区内に狭い範囲に限られていることを述べた。ま

た、東京には周辺の方言が絶えず流入しており、東京語にとり入れられた新方言が共通語の地位を占めて全国に広がる場合のあることを記した。第四節では、東京における語形や音声、アクセント型のゆれの例を主として年齢差との関わりについて述べ、共通語の基盤となるべき東京語の特徴を把握し、標準語形を具体的に認定するために、また、これから共通語として広がっていくであろう東京語の諸形式を予想するためには、現代東京語の年齢差の実態を詳細に調査する必要があること、その際には言語使用の実態だけではなく、規範意識についても調査する必要があることを記した。

昭和一六年に金田一春彦氏が鼻濁音の異変に気づいたように、また、中村通夫氏が昭和三年、氏が旧制高校生の折に「レルことば」の存在に気づいたように、さらに、最近では井上史雄氏の「新方言」の研究や私どもの行った東京アクセントのゆれに関する調査のように、私たちは絶えず東京人のことばを観察することによって、東京語の変化を直観し、それを調査によって裏づけて、共通語・標準語の現状を的確に把握し、さらに全国各地における普及状況を調査した上で、その将来を見通したいものである。

注(一) 日本放送協会編『全国方言資料』(全一一巻、一九六六)の「まえがき」

(2) 佐藤亮一「地域差と場面差——熊本県球磨川沿岸地域における調査から——」(国立国語研究所『方言の諸相』一九八五)

(3) 杉戸清樹「富良野言語調査から(2)——二七年間で使われ方の変ったことばと変らなかつたことば——」(国立国語研究所『富良野のことばをめぐって——富良野言語調査の中間報告——』一九八七)、相沢正夫「非全国共通形の使用意識——北海道言語調査から——」(国立国語研究所『地域語の変容とその研究法』一九八七)

(4) 御本人の話による。

(5) 野元菊雄氏の話による。

(6) 真田信治『日本語のゆれ』一九八三、六六ページ

(7) 国立国語研究所編。第一巻は一九八九年三月刊行予定。

(8) 『方言文法全国地図』第一巻によれば、「船カラ来た」は九州西南部から奄美・沖縄地方にかけて、また、「運動場カラ遊ぶ」は鳥取県から兵庫県北部にかけてそれぞれ分布する。

(9) 佐藤亮一「表現法の世界」(『上方ことばの世界』一九八五)。なお、小稿の成稿後、東京・大阪の若者を対象にした同様の調査結果が発表され、筆者の調査および推定を裏づけた(真田信治「話しことばの実態」『話しことばのコミュニケーション』一九八八)

(10) 前田勇『大阪弁』一九七七、一一一ページなど。

(11) 筆者はこの作家の名を承知しているが、この話の出典を確

認できないので、今はS氏としておく。

(12) 『市川市史』第四卷、一九七一所収。

(13) 井上史雄『新しい日本語』一九八五

(14) 岡野信子『日本言語地図』から二十年(佐藤泰正編『文学における旅』一九八五)

(15) 中村通夫『来れる』『見れる』『食べれる』などという言い方についての覚え書(『金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢』一九五三)

(16) 読売新聞社会部『東京ことば』一九八八、六三ページ

(17) 国立国語研究所『大都市の言語生活』一九八一

(18) 国広哲弥・中本正智『東京語のゆれ調査報告』一九八四

(19) 金田一春彦『ガ行鼻音論』一九四二(『日本語音韻の研究』一九六七所収)

(20) 加藤正信『東京における年齢別音声調査』(井上史雄編『『新方言』と『言葉の乱れ』に関する社会言語学的研究』一九八三)

(21) 水谷修『地方で出現するガ行鼻音』(『言語生活』四二九号、一九八七年八月)

(22) 柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編『東京語アクセント資料』一九八五。これは東京で複数の型が併存する可能性のある約一二八〇語について、東京生まれ育ちの二〇歳代から七〇歳代までの合計一九人を対象に個々の語のアクセント型を調査し、その結果を、『新明解国語辞典』『日本語発音アクセント辞典』『明解日本語アクセント辞典』『全国アクセント

辞典』の四種に記載されているアクセント型と対照させて示したものである。

(23) 注(22)に掲げた四種の辞典のうち、三種以上の辞典に共通に記載されている型が、われわれの調査した一九人のインフォーマンの中には一例も認められなかった事例は約四五〇語にのぼり、一方、調査した四種の辞典のうち、三種以上の辞典に記載していない型が一九人のインフォーマント中の六名以上に認められた事例は約一三〇語であった。それらの具体的な語例は日本文言研究会第四五回研究発表会(一九八七年一月)で発表した。

(24) たとえば、徳川宗賢・宮島達夫編『類義語辞典』(一九七二)は「まえがき」にそれぞれの言語形成期を記し、慎重な態度を見せている。このように、現代語の意味・用法を内省によって記述する際に、記述者の居住歴等を明らかにすることは、今や常識であると思う。

〔付記〕

筆者の勤務する国立国語研究所は国の機関の地方移転の候補にあげられている。所当局は移転に反対の態度を表明し、その理由の一つとして、国語研究所員は標準語圏に身を置き、自らの標準語感覚を磨く必要のあることを強調してきた。小稿は所長の命によって、「標準語感覚」について担当官庁の職員に解説するために記したものの(未公開)に手を加えたものである。ただし、筆者自身は、上の趣旨(国語研究所員が標準語圏に居住する必要性)に全面的に賛同

しているわけではないことを断っておきたい。

佐藤喜代治先生には筆者の東北大学在学以降御指導をいただいていた。また、小泉和先生には筆者が非常勤講師として本学に勤務するようになった昭和五四年以来御指導をいただいた。先生方の御退任を記念する号にこのような雑文を寄稿することは心苦しいがお許しをいただきたい。

両先生のますます御健康をお祈りし、今後の変らぬ御指導をお願い申し上げます。

（国立国語研究所室長）